

---

## カアディスからの手紙（116-2）

2006年7月30日

---

### 「レガッタ」の巻・其の二

---

さて、私達がこのお祭りで一番楽しみにしていたのは旧友レイノウド Reinoud van der Heijden との再会です。だから、レガッタ初日の26日は早くから埠頭の一番先まで行って入港する各船を見張っていました。



前日の夕方もベランダから港外の仮泊錨地に入ってくる大型帆船を何隻か見つけて写真を撮っておいたのですが、どういうわけかメモリー・カードが不調で、PCに保存する前に折角撮った画像が消去されてしまいました。こういう経験は初めてです。

\*

**Europa** エウローパ（オランダ語ではオイローパとなるらしい）が入ってきました。これが其のややクタびれた感のある古い帆船です。海軍の練習船などと違って、民間の訓練帆船は何処も勝手許は苦しく、オーナーが余程の太っ腹で、自腹を切って資金をつぎ込まぬ限り運営は成り立ちません。どうしてもみすぼらしくなります。

およそ船の整備・維持費は想像以上のモノ入りですが、帆船の場合は更に激しい金食い虫で、エウローパのような比較的小型の帆船でも膨大な整備費が掛かります。

また整備費以外の経費で圧迫が激しいのは人件費。乗組員は決まった給料のあるペイド・クルー **paid crew** と、無給のボランティア・クルーがいますが、有給乗組員は必要最小限、大部分を無給のボランティアに頼っているのが普通です。

一方収入は、このエウローパなどのクラスでは精々4～50人、多くても60人位の訓練生の受け入れ設備がヤット。しかも、どの航海でも満員になることは少ない。

更に、訓練生からは客船の船客のような莫大な乗船料をフンダクル訳にもいかない。何しろ青少年の心身の鍛錬・健全育成が謳い文句ですからね。  
言うまでもなく収支のバランスはめっちゃくちゃです。

Rも関わったことがある日本で唯一の「純」民間訓練帆船「海星」も維持経費と訓練生不足で段々先細りになりとうとう売船の憂き目になってしまいました。

休暇の取り方が欧州諸国とは大いに違う日本で、しかも海事に対する関心の極めて薄い日本では仕方がないといえば仕方がありませんが、残念至極です。日本では個人単位でこういう訓練帆船に乗船しようという勇気ある若者が少ないということか？

そんなわけで事務局長レイノウドもアタマの痛い日が続くわけですが、帆船の魅力のトリコになった彼は、そんな困難をものともせずこの仕事に打ち込んでいます。

次の写真・左がそのレイノウド。帆船の魅力に取り付かれて、マトモな船舶運航会社の社員からこの世界に入り、こうして時々臨時クルーとして乗り込み、食うや食わずの生活でも大いに人生をエンジョイしている様子がアリアリと窺えます。



もう一人懐かしい人と再会しました。右の容貌魁偉の巨人クラス **Klaas** です。Rが4年半前レイノウドに頼まれてエウローパの日本でのドック入りのお手伝いをしたときの船長です。

数多い欧州の帆船乗りの中でもこの人ありという名うての船長。

其の容貌は **Stein Dodge** (酒呑童子) もかくやと思うほどゴツイですが、この通り優しい目がそれを打ち消して余りある。勿論彼もレイノウド以上に帆船に取り付かれた男。帆船を操っている時こそが無上の喜びというまさしく **Flying Dutchman** フライイング・ダッチマン。

\*

このほかの船の中で私達のお目当てはなんと言ってもスペイン海軍練習船ファン・セバステアーン・デ・エルカノ。カアディスを母港とするこの船を見学する機会がな  
いまま過ぎていました。最後の最後でようやく船上に上られる機会を得たのです。

防波堤をかわして入港してくるエルカノ。あらゆる船はこの角度または斜め後ろからの姿が最も美しいと信じていますが、このショット、残念ながらタグ・ボートが邪魔  
です。

この日エルカノは右舷着岸だったので必然的にタグは左舷につき、こうなってしまいました。港の反対側へ行けばタグはクリアーできたでしょうが、今度は逆光で結局イ  
イ写真は撮れなかったでしょう。



こんな港の入り口で既にタグ・ラインを取ってあるのが見えますが、商船の入港ではスペインのどの港でもコッチがイライラするほどタグ・ラインを取るのが遅く、岸壁の直前になってあたふたと取るのが普通でした。この大事な大事なエルカノを迎えてパイロットもタグの船長も慎重にならざるを得なかったんでしょうね。

改めてこの写真を見て気が付きましたが、どうやら国王座乗ではなかったらしい。海軍のことは良く知りませんが総司令官たる王様座乗ならば国王旗とか総司令官旗とかいう多分シッポの長い旗が掲げられているはず。それらしき旗は見当たりませんから国王列席の開会式と思ったのは事実誤認だったようです。

私達はエウローパとエルカノとイギリスのロード・ネルソンの三隻を見学したいと目論んでいました。エウローパは初日26日にレイノウドの案内で見学、その後デッキでクラス船長自らのビールのサービスと至れりつくせりの歓待で大満足。其の日は一般公開日ではなかったし私達はスペシャル・ゲストで待ち時間もありません。

ところが二日目27日のエルカノの一般公開には参りました。何しろ数多くの船の中でも群を抜く一番人気の船ですから、乗船希望者の数はものすごく、其の行列は港内岸壁上では足らずに港の柵の外的一般道路上に5~60メートルも伸びていました。

舷門からは多分200メートルは軽く越えていたでしょう。初めは若い友人ファン・

カルロスも一緒に並んでいましたが、其の日大学に用事のあった彼は途中で行列の余りの長さに諦めて抜けてゆきました。

＊



左は既に行列の半分ほどを進んだ所。右手のパラソルの向うに見えるのがエルカノの船尾で其処から右に曲がって船体中央部の舷門までまだまだ。ヤレヤレ。

右、待ちに待ってヤット乗れた船上もこの通り、行列がそっくり船上に移っただけ。この船がこれほど人気があるとは思っていませんでした。そして、船内一般公開とは言え、見れたのはデッキの上だけ。これには些かガッカリしました。

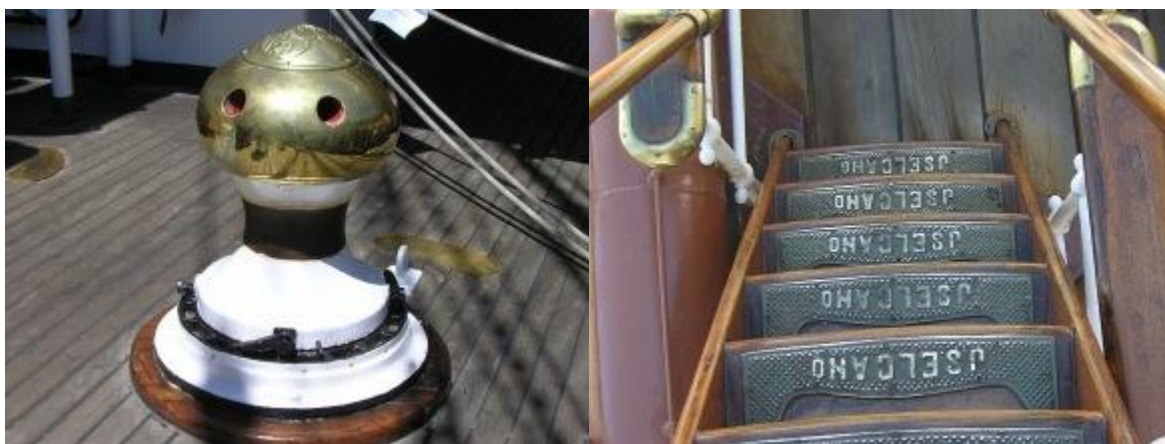
さらに、船側は乗船者を積極的にコントロールして多くの人に船内のヨリ多くを見てもらおうという気はないらしく、ゴク小数の乗組員を立ち入り禁止箇所に配置していましたが、彼らも何か聞かれれば言葉少なに答えるだけのようでした。

これも意外でした。日頃は機関銃乱射のように喋り捲るオバサンもオジサンも遠慮がちにモソモソと小声で聞いている風です。海軍と言うことで遠慮があるのか？何を聞いていいのか分からず戸惑っているのか？ 不思議な光景に見えました。

一方では、海軍は志願兵の徴募は常時やっているらしくポスターは良く見かけますしこの日も岸壁上には海軍のテントがあって盛んにPRをしていました。こういう催しは海軍に親しみを持ってもらえる絶好の機会だと思いますが、そういう姿勢は船上の乗組員にはトンと見られませんでした。其処が民間訓練船との決定的な違いか？

＊

＊



左のロボットのようなもの、ナンだと思いますか？ 目のような穴がアタマの周囲に全部で六個あるんですが、其処に差し込んだ棒を押すと全体が回転します。そして胴の部分の黒く見えるところにロープを巻きつけると重いものでも引っ張れるわけ。これはキャプスタン capstan で、ここのは大きなセールを引き上げるのに使います。

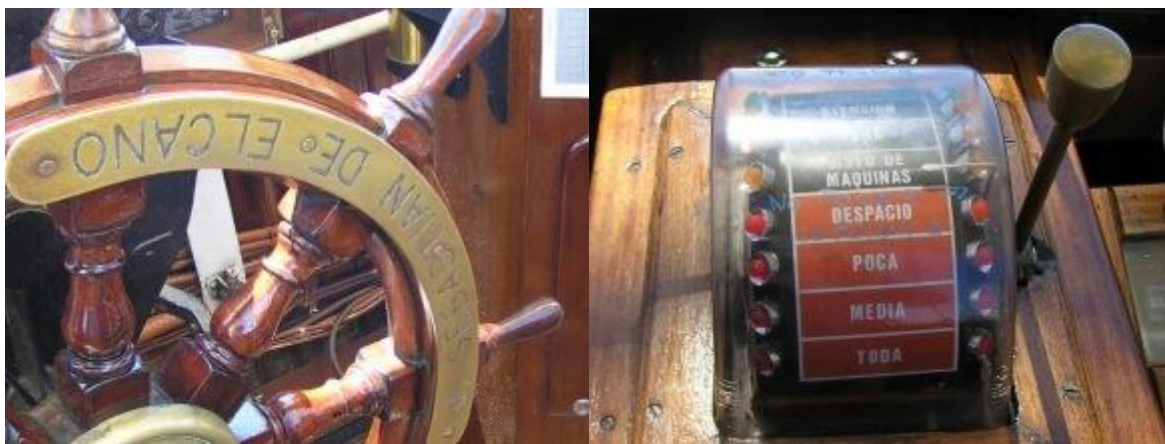
右は船名の略 J. S. Elcano のロゴの入った鋳物の階段ステップ。

\*



エルカノの最もエルカノらしい部分はこれだと思います。この三本のヤード(帆桁)に

張る三枚のスクエア・セイル(square sail=横帆) が後は全部フォア・アンド・アフト・セイル(foresail and aft sail=縦帆) だけのこの船のアクセントです。  
トプスル・スクナー(topsail schooner)という帆装の船の美しさはこの横帆と縦帆のバランスのよさだ、と言い切っているのではないのでしょうか。これこそ機能美というものでしょう。



これは機走といってセールではなくエンジンで走る時のブリッジ(船橋)の舵輪とエンジンテレグラフ。右のレバーを動かしてエンジン・ルームに回転速度を連絡します。  
despacio は極微速、英語では dead slow、poca=微速=slow、media=半速=half、toda=全速=full。こちら後ろ側の赤は後進、向こう前側は緑で前進です。  
この仕組みは一般商船でも全く同じで、長年親しんだもの。

\*

帆走している時、大抵の帆船は船体の後ろの部分で舵を取るようになっていて、その方が全部のセールが目に入るから・・・。帆走している時は船体の向きを細かく修正すると言うより全てのセールにうまく風を入れることが大事だからです。一方、機走時のブリッジは大体少し前の方にあります。其の方が前方が見え易く障害物を避けやすいから。



ここでスペイン海軍に苦言を一つ。左はデッキの船室の壁に張ってあった禁煙札で、

この中には可燃性ガスがあるから煙草は吸うなというもの。 Rの長年の船乗りとしての常識ではたとえガスがあろうとなかろうと、たとえ一般商船のようにスティール・デッキであろうとなかろうと、デッキ上で煙草を吸うなどはもってのほか。

然るに何たること、この船では自分でこういう張り紙をしているくせに、乗組員自身が其のすぐ近くでスパSPA。 このチョット前にも別の場所で若い女性水兵がヤハリスパSPA。ブツたるんだ船だナー、俺の船なら拳骨モンだぞ、と思ったばかり。しかも今度は金キラ・バンドの士官帽をかぶった将校サンまでとは・・・。

これはもはや禁煙法とか何とか言う以前の海軍軍人としての重大な欠格ですナ。まあ、およそスペインの人に、規律だとか、我慢だとか、努力だとかを求めるのは無理と言うもんか？

それはそれで愛すべき性質ではあるかも知れないけれど、彼らは一般人ではなく海軍軍人ですゾ。しかもこんな綺麗な帆船の木甲板上で、シカモ、シカモ近くには可燃性ガスの貯蔵室があるというのに・・・。もう何をかイワンヤ。

これだもの、ネルソン提督に軽くひねられちまうのも無理ないわナー。

と、まあ色々文句は並べたけれど、エルカノは素晴らしい帆船であることは確か。こういう素晴らしい船を造れる土壌というのは一朝一夕で出来上がるものではありません。この船が出来たのは1927年だそうですが、其の頃のスペイン人はもっと性根が座っていたのかも知れない。今は駄目だナー。

二日目はこんな風で、炎天下の長い長い行列に些かうんざりしたし、乗船後もあまりいいことなかったもので、三日目に予定していたロード・ネルソンの見学は外からだけにすることにしました。スペインの海軍の船とイギリスの民間の船の違いがどんなもんか、船内に入って較べてみたい気はしないでもなかったんですがネ。

\*

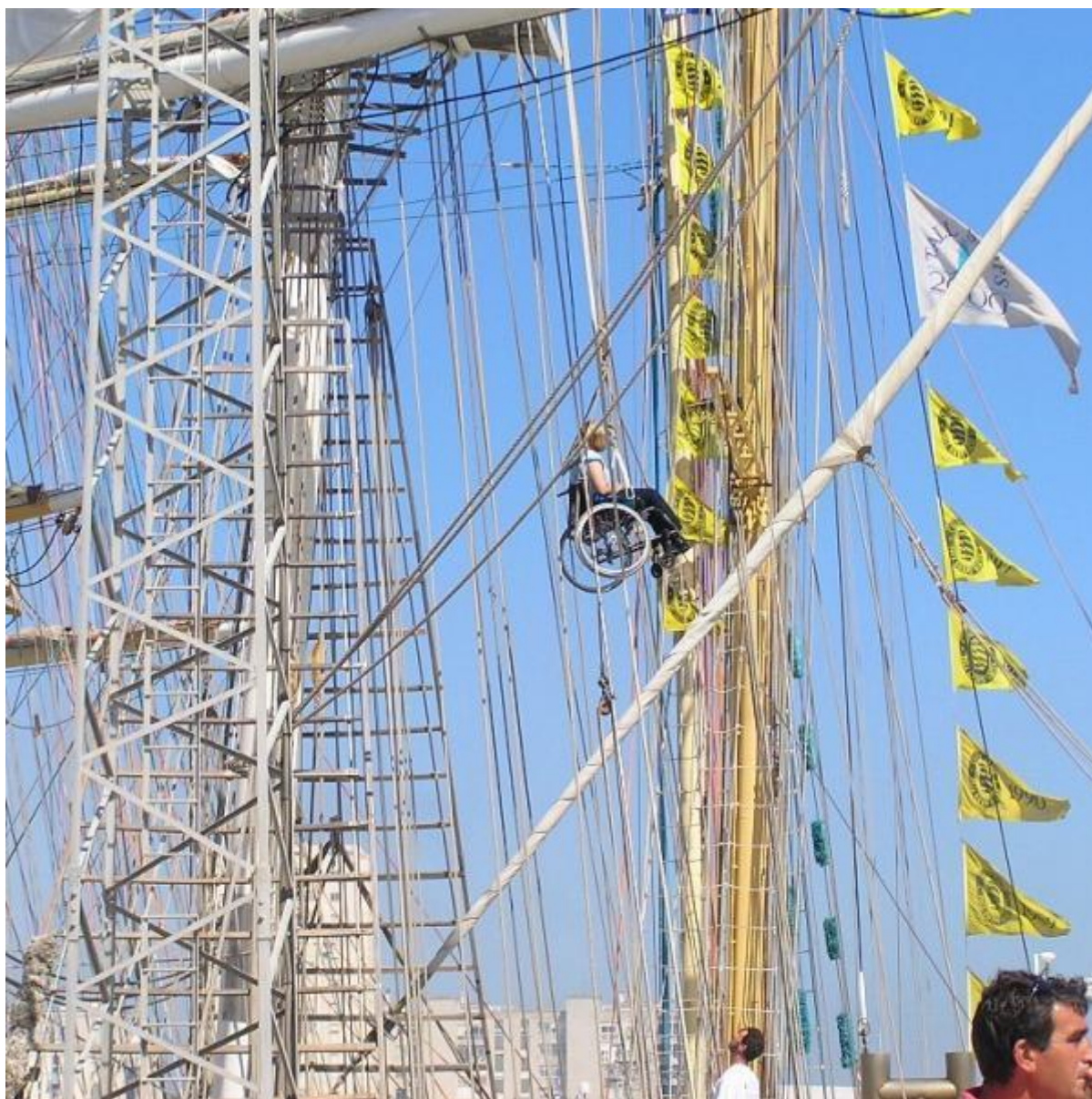
前にも言いましたが、ロード・ネルソン(Lord Nelson) という船は障害者でも帆走の醍醐味を味わえるように色々な仕掛けをしてある船です。

数年前迄マーク(Mark William Kemmis Betty) さんと言う人が船長をしていました。彼とは前述の海星で同船したことがあり、以来時々メール交換をしていました。私達がベナルマデナにいた頃、夫婦で遊びに来て一週間滞在してゆきました。

いかにも元英国海軍軍人らしいきりっとした所とたくまざるユーモアと茶目っ気を併せ持つ愉快的な人物です。其の彼が乗っていた船を見てみたいと思っていたのです。

\*





この日はロード・ネルソンの一般公開はなくて中へ入るつもりでいたら悔しい思いをする所でした。 私達が船の側へ行った時、丁度障害者プログラムのデモをやっていましたこんな風に車椅子のままでもマストの高い所まで行けるようになっています。

そのほか体に巻いたベルトで吊り上げる装置などもあり、デッキ上の殆どの場所は車椅子で動けるようにバリアー・フリーになっているようでした。

この女性が本当の障害者なのか、ボランティア・クルーがデモのため乗っかっているのか知りませんがのんびりリラックスしてますね、恐怖感を感じられませんでした。

\*

しかし、洋上の揺れる所では普通ならやはり怖いと思うでしょう。それでもこういう経験をしてみたい、させてあげたいという双方の熱意なくしては成り立たないことで

はあります。こういうことを平気でやれることこそ海国であり、海の子ではないか？  
日本でこんな船が出来る日は？マア永久にこないでしょうね。

\*\*\*

---

また、容量が足りなくなりました。この続きは116-3でどうぞ。それで、ホント  
におしまいです。

---